

合気道から導かれる共生
——自他の関係と内属的共同性——

Kyosei derived from Aikido: The Relationship between Self and Other, and Its
Internal Co-existence

砂子岳彦 福田鈴子

キーワード：合気道，共生，自己調和，内属的共同性，克己

1. はじめに

武道は試合を通じて勝敗を決するのが通常の在り方である。これに対して、合気道は人との争いを目的とした武術ではなく、人が他者と相対した時の在り方（自己の内面における自他の関係性）によって成り立っているものであり、人とのコミュニケーションを図る武道であるともいえる。合気道における自己と他者の関係から在り方がどのように捉えられているのか解析していくことによって、人類が共生していく在り方にも大きな意味をもたらすとみている。なぜなら、もっとも対立的な状況にあって、合気道は文字通り調和を体現しているからである。

本論の目的は合気道から共生の構造を浮き彫りにすることにある。その結果、合気道に実現されていることが、自己の内面にある自他の関係性としての内属的な共同性に由来することが示される。本論の論点は、その内属的共同性が人間の実存的構造からもたらされるという点にある。実存的構造とは自他の実存、すなわち事実的存在と想像的存在の関係性を意味する。その構造の上で存在様態が在り方として実現する。武道という最も対立的な状況において見出された調和の構造的な仕組みがあるとするれば、それは理想論ではなく、不協和的な状況においても調和を実現する強靱な方法論をもたらすことが期待できる。福田・砂子は調和的認知（自己調和と呼ぶ）をその要素に含む、実存的構造を報告している（福田・砂子 2018, p.119）。その構造によって、武道の精神、とりわけ合気道の調和的な技の術理を説明づけて、共生的価値観を与える内属的共同性を明らかにすることができる。そのために、第2節では武道の歴史をたどり、「和の武道」と呼ばれる合気道を第3節に取り上げ、第4節で合気道の術理（理合）から導かれる実存的構造を示す。第5節では合気道から得られた知見の共生への応用を考察する。

2. 武道の成立と人間形成

日本の歴史のなかで、戦う技術としての武術は和をもたらす武道へと洗練されていった。合気道に至っては、一見して相反する武と和を併せ持つ「和の武道」と呼ばれている。歴史を紐解きながら、武道の形成過程を明らかにしていく。

魏志倭人伝にすでに倭人の弓が記載されている（松尾 2014）。その頃既に武術として戦闘の技術が成立していたことが伺われる。10世紀には武士が誕生して、職業的な集団が武術を習得していた。15世紀になると、陰流、神道流、念流などの流派が興った（魚住 2008, pp.10-11）。戦いを前にして、神仏に武運を祈ることを通して、武術と宗教の関係は自然に成立していたと考えられる。古くから神

道・仏教・修験道などで身心を練磨する修行法があったという意味では、武術とはいいいながらも、精神性を重視する武道としての伝統は既に始まっていたと考えられる(注1)。

徳川家康は戦国時代を終わらせ、江戸幕府を築いたのちも武芸の稽古を奨励した。江戸時代、諸藩も兵法師範をおき、師範は自らの兵法を整備していった。殺傷能力を高めていった武術からの転換が17世紀に顕著に見られる。柳生宗矩の『兵法家伝書』や宮本武蔵の『五輪書』はこの時期に書かれている。柳生宗矩の「殺人刀・活人剣」(せつにんとう・かつにんけん)は、禅語からきた言葉であり、己の執着を断ったところからの生の消息を示している。幕府による治世のもとで、人を活かす「活人剣」はその意味を次第に人間形成へと重心を移していった。相手に「打たせて勝つ」、恐怖を抱かず、自分から技を出そうとも思わず、打ち込んでくる間合を冷静に見切ることが出来るように、「無心」が柳生によって説かれている(渡辺 1985;魚住 2012)。『五輪書』には、心法も記されている(鎌田 1986)。

1882年(明治15年)、山岡鉄舟は春風館を設立し、禅に基づく精神性を重んじる一刀流の剣術指導を始めた。維新後、山岡は江戸の剣術を近代剣道へと橋渡しした(魚住 2008, p.18)。同年1882年は、嘉納治五郎が講道館を設立した年でもあった。嘉納は講道館柔道をたちあげ、柔道の目的として「体育、勝負、修心」を挙げ、「修心」として克己や礼節などを身に付けることを説いた(小谷 1988)。剣術や柔術が剣道や柔道となり、大正時代にはそれらの総称として「武道」という言葉が使われた。日本武道協議会が1987年に制定した『武道憲章』には、「武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬道として洗練され発展してきた」、「術から道へと発展した伝統文化である」と謳われている。つまり、武術から武道への呼称の変化は武芸がもっていた修養的側面をあらためて認知する役割があったとみられる(注2)。

武道各派の稽古において共通するのは、礼儀作法、見取り稽古、型稽古をもっていることである。とりわけ礼は、互いに他者を敬う形式である。武道が盛んになる一方で、競技化・スポーツ化が進んだ。藤堂によれば、礼の有無が武道とスポーツの違いを分かちとしている(佐々木・柏崎・藤堂・村田 1993)。藤堂は論語を引用し、「克己復礼」(論語)は武道の自己抑制につながり、「礼の用は和を以て貴しとなす」(論語)ことから、対人格闘技である武道における最終目標が和にあることを意味するという。中林(1994)は、行為としての礼は心身が統一された状態であるとする。特に試合では勝敗をかけるために、自他は対立的であるが、「礼に始まり礼に終わる」とき、礼によって相手と非対立的になると中林は述べている(中林 1994)。

武道は学校教育においても人間形成の手段としてとらえられている。高等学校学習指導要領(平成21年3月告示)によれば、「武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする」(文部科学省 2009)としている。このことから、武道に対して、相手への尊重と責任、そして健康・安全についての教育効果が期待されていることがわかる。さらに、武道は「克己の心や道を追求するといった考え方などをもつ我が国固有の文化」(ibid)と位置づけられている。

以上から、「克己」が人間形成としての武道における鍵語の一つであることは明らかである。『高等学校保健体育解説』(文部科学省 2009)に書かれた「克己の心」とは、己に克つ心であり、一般に己の欲や感情に克つことと理解されている。「克」は象形文字で、重い兜を身につけた人の象形から、「重さに耐える」、「打ち勝つ」を意味する武術に由来を持つ字である。しかしながら、食欲に克って減量したり、苦しさを逃れたい欲求に克って猛練習したりすることなら、武道である必要も無く、スポーツにおいても実行されている。ルールを守ってフェアに戦うスポーツマンシップは、欲やそのときの感情に克つ克己を要請する。すると、あらためて問われるのは、武道における克己とは何を意味するのかということである。また、中林(1994)の主張のように、礼において心身一如、自他の非対立が成立したとしても、稽古や試合において非対立とは述べられていない。武道のなかで、とりわけ合気道は、和の武道を標榜しているのだから、その成り立ちと特徴をつぎに示す。

3. 合気道の成り立ち

合気道は植芝盛平(1883-1969)を開祖とし、その流派や流儀が多様になりつつある現在においても、開祖の在り方・考え方・技は大きな存在感をもって受け継がれている。工藤・志々田(2010)によれば、植芝盛平は自己の武術を大東流合気柔術から相生流合気柔術、皇武道、合気武道とその名称を変えて、現在の合気道に至っている。志々田(1992;2008)によれば、1928年に相生流合気柔術と宣言したときに、事実上大東流合気柔術から独立したとしている。合気道がそれまでの武道と異なるの



写真1 植芝盛平による入身投げ(出所:公益財団合気会)

は、武道の対立的な勝敗の枠組みから超え出たところにある。それゆえ、合気道では試合を排している。植芝は勝敗という言葉を使わずに「絶対不敗」とする。「絶対不敗とは、絶対に何ものとも争わぬことである。勝つとは己の心の中の『争う心』に打ち勝つことである」(合気道神髄p.35)。「真の武道には敵はない、真の武道とは愛の働きである。それは、殺し争うことでなく、すべてを生かし育てる、生成化育の働きである」(ibid.)と語っている。

戦後、武道に対する風当たりが強かったなかで、二代目道主となる植芝吉祥丸は、1946年当時の文部大臣田中耕太郎に寄附行為変更理由書を提出している。それによると、「『合気精神は愛気の発露』という理念を盛り込み、また『護身的体育』や『社会の平和と福祉に貢献する人材の養成』といった当時の教育理念も含め」(パイエ, 2016)ている。また、海外の研究者は合気道に対して、「人と人の関係の劇的破壊の時代であった。第二次世界大戦中に心血を注いで植芝が創った合気道は、日本の宗教に基づき、しかし何からも自由であった。その基本的な信条は自己の内なる調和の創造であり、他者へと繋がる知であり調和である」(Margaret, 2003)と報告している。先の大戦を経て、植芝は、平和の尊さと、

平和が個の調和に基礎づけられていることをますます確信し、その道を合気道によって実践していったことが伺われる。すなわち、克己の伝統をもつ武道のなかにあつて、武道の克己精神を徹底することにより、「争う心」を超えた自他の関係を創造する武道として合気道が誕生した。

合気道の精神の特徴は、その名前からも察せられるように和の精神である。『合気道の精神』を「合気とは愛なり。天地の心を以て我が心とし、万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ。合気とは自己に打ち克ち敵をして戦う心無からしむ、否、敵そのものを無くする絶対的の業であり、道程である。」(万生館合気道 年不詳)としている。これによると、「克己」とは自己に帰属する「争う心」あるいは「敵そのもの」を「無くする」ことである。

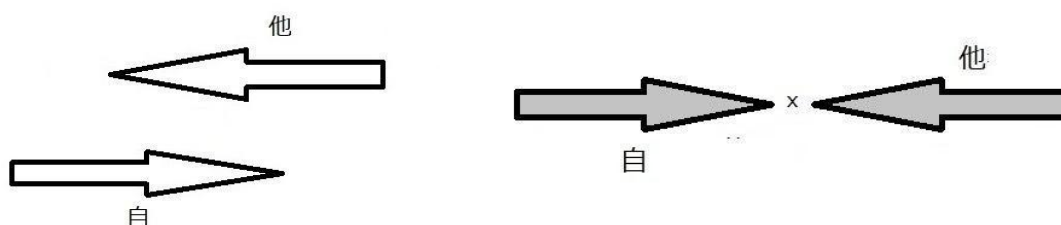


図1 合気道の入身による交叉
(出所:筆者作成)

図2 格闘技によく見られる力の衝突
(出所:筆者作成)

合気道の技の特徴は、そのもっとも主流派とされる公益財団法人合気会によれば、「合気道は相手といたずらに強弱を競いません。入身と転換の体捌きと呼吸力から生まれる技によって、お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の錬成を図るのを目的としています。また、合気道は他人と優劣を競うことをしないため、試合や競技を行いません」(公益財団法人合気会 年不詳)としている。試合がないことによって、合気道はスポーツ化を免れている。基本となる技は三千くらい有ると言われている中で、入身が使われている技が多い。入身は体捌き(技を構成する身体の移動方法)であり、合気道の特徴を顕著に表す捌きの一つである。入身は、身を入れる、すなわち攻撃してくる相手と交叉する捌きであり、相手の死角に身を入れる、相手の懐に入る動きである。入身によって、攻撃してくる相手との力が交叉する場ができ(図1)、交叉から自他が互いに巻き込み合う運動が生じる。この運動は、衝突のない円運動である。他の格闘技では、力と力は交叉せず、しばしば、その先端でぶつかり合い、強い方が弱い方を押し切る(図2)。これに対して、合気道の入身は交叉するので衝突が無い(図1)まま、その後円運動に導かれていく。図1および図2は、矢線の方に移動する身体にともなって、〈自-他〉が交叉する入身(図1)と衝突する場合(図2)を比較している。さらに、合気道の実存的な意味を解明するためにその理合の分析をすすめる。

4. 合気道の内属的共同性と実存的構造

武道修行者は克己心によって、自他の対立的な認知から「敵そのものを無くする」非対立的な認知への転換をもたらす。この精神を身体的活動として体現した

入身の理合から実存的な構造を浮き彫りにする。

1) 合気道の技を支える認知

合気道の入身によって、攻撃する相手の脇に入身すると、相手は前にいたはずの敵を見失って空振りする。さらに、自他の力が交叉したところに力の均衡がとれる位置ができる。この位置をゼロポイントとここでは呼ぶとする。ゼロポイントを中心に転換すると、渦に手を入れたときのように、互いに吸い込まれる共働的な動きが生じる。共働的な運動は相手の攻撃が原動力になっているので、相手は自らが原因となった結果として、共働的な運動に引き込まれる(写真1)。つまり、攻撃された側は入身によって安全な位置取りを得る一方で、攻撃する側は共働的な円運動のもとでその主導権を渡す(渦に巻き込まれる)ことになる。その結果、円運動として(和が輪として)自他の調和的關係が実現している。さきに、武道において対立的試合の前後の礼は非対立となる(中林 1994)と記したが、合気道においてはどの瞬間も共働的・調和的關係として非対立が実現している。合気道の特徴は試合が無いだけではなく、稽古する技自体も調和的であることだったことがわかる(注3)。

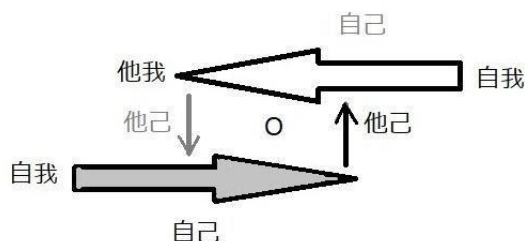


図3 入身の四項関係
(出所:筆者作成)

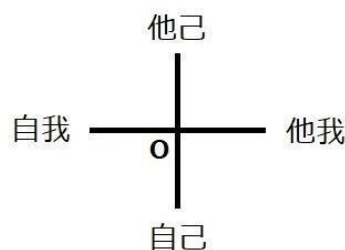


図4 認知の四項関係(Oは自己調和)
(出所:筆者作成)

図1の入身技における自他の力学的な位置関係を、それを支える認知に還元することによって、認知の關係としてつぎのように実存的構造を導くことができる。攻撃する側にとっては想像的な敵の身体(他我と呼ぶことにする)の位置と異なる位置に相手の身が入るので、虚空を攻撃することになる。攻撃する側が気づいた時には相手の見え姿(事実的な相手の身体として他己と呼ぶことにする)は前方ではなく横に立っている(攻撃方向と直交している)。つまり、入身によって自他は想像的な關係と事実的な關係の2つの水準に分岐する(これに対して図2の衝突においては分岐しない)。事実的な自他の關係を〈自己－他己〉と表すことにする。想像された關係〈自我－他我〉と、入身による事実的な自他の關係〈自己－他己〉は図3のように直交している。すると、図1においては単に自他として表現されていたが、よりの確には入身によって、自他の關係が想像的關係〈自我－他我〉と事実的關係〈自己－他己〉という二重の対、四項關係として捉えられる(注4)。図4にこの四項關係のみを抽出して、認知を配位している。人間の实存的構造は四項關係を示す図4に表れている。

するとゼロポイントは自己と他己、そして自我と他己の四項關係の均衡点となる。たとえば、四項關係のうち自我のみに重きがおかれると、自我中心的認知を反映している状態であるから、図1の交叉が形成されず図2のような衝突となり、均衡が崩れて力ずくの技になる。逆に他我に偏重すると相手に操られてしまう。

しかし、ゼロポイントを中心に転換するならば、自他の四項は共働的に動いて円転する。その主導権は、四項関係を視野に入れる(相手を取り入れて内に視る)ことができる認知によって得られる。この認知は入身によって生じる四項関係のバランスから円運動(和)を導くことで相手と同化(共働的運動)し、「敵そのものをなくする」ことを可能にする。この調和の鍵を自らに見出した者が勝敗を制することが可能となる。そのためには、相対的に〈自我－他我〉のみの認知に囚われてはならない。〈自我－他我〉の思考から出ることによって、自他の関係性を己に視ることに通じる。その結果、二項対立(1次元)から四項関係(2次元)へと次元が上がることによってそれらのバランスを(円運動のように)とる可能性が開かれるのである。

自他の認知は日常生活に移して考えても同様である。たとえば、口論になっているとき、大抵〈自我－他我〉のみの次元で思考が働いている。しかし、それを起こしているのは自分の思考だということがわかれば、一步引いて、自らの非を認めたり、落とし所を見つけることができたりする経験は誰しも持っている。その視座は、〈自我－他我〉の次元とは異なる事実性から見出させる。しばしば、第三者は当事者たちを冷静な立場から状況を視ることができるが、それを当事者である〈わたし〉の心中において行うことも可能である。このような自他の関係性は、福田・砂子によって、四項関係から論じられている(注4)。四項関係の均衡のとれた状態は、自らの内に見出されるために「自己調和」と呼ばれる(福田・砂子 2018)。武道の克己を徹底させた先に、合気道は内属的共同性を見出し、自己調和を技によって実現したといえる。

2) 合気道と自己調和

自己調和とは他者の影響を受けて、自己と照らし合わせることにより新たな自己を創り出す認知である。人は他者を視たときの事実的な見え姿(他己)から想像された他者像(他我)を立ち上げる。その他者像に対して「想像された自己」(自我)が相対する。これら(他己・他我・自我)は個人の意識(自己)のうえでおきている認知である。ここに自我・他我・自己・他己の四項関係が成立している。自己内におきている想像的關係〈自我－他我〉を、自己と自己の外にいる他者との関係であるとしているのが通常である。しかしこのような認識から、さまざまな齟齬や、意のままにならない他者との関係に直面する原因設定となっている。

合気道において、自己調和は入身におけるゼロポイントの均衡として実現している。相手との力の差(たとえば、女性対男性、1人対複数人)があつたとしても四項関係とそのゼロポイントの領域(内属的共同性)に気づいていれば、自己の中で相手とぶつからない(葛藤をもたない)で共働的な運動に導くことができる。このことから、自己調和は机上の空論ではない。

克己によって「敵を無くする」ということが、ここにきて「敵」が外在する他者ではなく、自らの内で想像された他者であることを見抜いて、自己調和することだと理解できる。自己調和とは、外在する敵を相手にするのではなく、自己によって敵が敵として想定されたものと受容することである。自他の関係性が自分の起こしたことであることが受容されると、自分の一部であることから自ずとその関係性を使うことが可能になる。この己の内にある内属的共同性が自己と他者の共働的關係、ひいては共生をもたらす鍵と考えられる。

自己調和は他者を内に視る認知であるから、武道にかぎったことではなく、日常的に見られる。往々にして家族は自分にとって自己調和された存在であり、日本では家族を「内」の者と言うのは排他的になりにくい内属的共同性が形成されていることを表している。また、当然のことながら、同一の文化内においては異文化問題が生じないのは異なる文化という相対的認知が無いからである。さらには、多発する災害に対して、世界中で支援の輪が広がりを見せているのも、被災者を自らに引き寄せて視る気運の高まりからである。

5. 武道における在り方と共生への応用

武道の試合において、他者の不確実さは時として致命的である。武道は、不確実さのなかでその都度答えを出していかなければならない切迫さにさらされている。合気道も武道として理想論や机上の空論は通用しない。それゆえ、「合気とは愛なり」という言葉は単なるスローガンではなく、むしろ「絶対不敗」の合気道の理念を表現しているのである。すなわち、他者を愛するとは、外在する他者をこれから愛そうという行為ではなく、相互内属的にすでに共存している自己内の他者を自己受容する確かさであり、自己調和(克己)するということである。合気道はその自己調和を技によって表現している。武道という対立的条件において自己調和を成立させることができるならば、日常生活において応用することは可能性であるといえるだろう。

合気道の在り方は共生社会にとっても参考となる経験則である。共生を考える上で、武道が自らの内に相手を視るように、意識的に異文化をとらえていくのは有効だと考えられる。一例を挙げれば、ニュージーランドにおいて共生を果たしているのは、白人がマオリ族を自文化の一部として、個々人のなかで認知していった経緯がある(注5)。異文化集団といえどもその概念的認識は必ずそれを認識する個人にあるので、異文化共存は、日常の生活における自他の関係性に還元される。その意味で、異文化問題は(外部的な施策は必要としても)個人の問題に還元される。

以上により、合気道から共生に対して、つぎのような提言を導くことができる。共生への第一歩は自らに問うことである。他者との共存の鍵は自己にあり、他を内に視る視点によって、自己調和を担保することができる。それを実行するうえで、実存的構造(図4)を知ることは調和的認知を見出す助けになるであろう。合気道は他者とのコミュニケーションにおいて、他者を知り、自己を知る道である。この姿勢が異文化共存を確実なものにしていくことを示唆している。一個の人間の実存的構造が他者を含むことから、その内属的共同性によって共生への応用を可能にしているからである。

自己調和は、認知の問題であるため、共生への応用がたやすいといっても、(克己のもとでは瞬時に実現されるが)すぐに集団的に実現するかどうかは別の問題である。他者を内に視るだけでよいという意味では、自己調和は困難な道ではないが、それを実行するかどうかは個人の選択にかかっている。この主張はすでに、ユネスコ憲章に、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と書かれている。本論は「人の心の中に平和のとりで」をどのように築くかを示しているとも言える。すなわち、心の中の「平和のとりで」とは、戦いに抗うというよりも、和合すべくしてすでにある内属的共

同性に気づくことである。他者とこれから和合する能動ではなく、自らの実存的構造のなかにすでに他我があって、それも事実的に自分の一部であるということの受容である。おそらく、憎しみ合っている自他のあいだで受容を選択するのは強い信念が必要であろう。そのためには、実存的構造のモデルによる理解が有効である。共生への道のりは、この実存的構造に基づいて共生をまず〈わたし〉の問題とし(克己)、つぎに先駆けて自己調和を実現した人から、自己調和の連鎖をおこしてゆく過程が現実的である。

6. おわりに

人間の構造を解く視点は多岐に及ぶが、「在り方」は最も人の基盤となる理論であると考えている。思考(考え方)は「在り方」によって支えられるという意味で「在り方」は基盤となる。「在り方」とは自他の事実的關係〈自己—他己〉と想像的關係〈自我—他我〉に跨る基盤となる認知である。この実存的構造を共生に応用することは、真の人の在り方が見えてくると同時に、人の生き方にまで大きな意味をもたらすだろう。それが新たな共生論とでもいえよう。

合気道は古くから実存的構造に則った武術が備わっていたとわかり、人と争い、競うことよりも人と人が交流することで互いの調和点を引き出そうとしていた。合気道が開かれた頃の日本は戦争へのめりこみつつあった。それには当時の日本人が他者と協和的にコミュニケーションを図るすべが身につけていなかったともいえる下地があった。己の生きる道のみを見て歩むことに力を注ぐことが常だった。他者と調和せずとも己の領域が安泰であればそれでよい風潮だった。それは今の異文化問題のように、自己と他者を分離して捉える自他分離型思考が下地として、自分だけが良ければよいという意識が働いていたからである。

地球規模の変革により、今日は他者と調和せず己の領域が安泰であることが困難な時代になった。現代の世界は、相対主義的な自他の在り方を貫くことの限界を経験しつつ、共生を必要としながらも不確実性に直面している。その一方で、武道は長い歴史をかけて、他者の不確実性に向き合ってきた。武道家は、相手と対峙して、勝つために技量を磨いてきた。しかし、さらに技量の高い相手に挑まれるという繰り返しのなかで、植芝は絶対不敗の在り方を見出した。戦わなければ負けない。さらに一步進んで、調和することができることを合気道は体現している。調和の鍵は克己、すなわち己の内に内属的共同性をみる自己調和の在り方にある。どのような状態にあっても、自他の対立は自己の思考の中にあるという理を知って、自他の関係を自己受容することによって、対立が解消される。それは技や考え方というよりも、在り方、すなわち認知の問題である。植芝は、「相手に剣を振りかざすのでは無く、心を差し伸べなさい！合気道に於いて技法は二次的なものです。肝心なのは技の持つ精神(霊)に気付く事です。私のこの言葉を世界の人々に伝えて欲しい」(アンドレ 1996, p.3)と述べている。

[注]

- (注 1) 小笠原家には、弓馬や礼式の故実を記した『小笠原流弓馬諸礼伝書』が残っている。
 (注 2) たとえば、剣道連盟は1975年(昭和50年)に「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である」とする「剣道の理念」(剣道連盟)を制定している。以上のように、武道の歴史において、戦う技術から人間形成へとその目的が変化していったことがうかがわれる。
 (注 3) 試合がない武道としては他にも弓道、居合道などがある。また型稽古を主とした体術もある。

(注 4) 自己, 自我, 他己, 他我, 自己調和などの用語をあらためてここに定義する。本論で記した実存的構造を, 福田・砂子(2018)は「人間構造」と呼んでいる。

表1 認知とその定義
(出所: 福田・砂子(2018)より一部改変)

用語	定義
自己	自我, 他己, 他我を直接受け, 体験できる場
自我	自己の経験も含め思考, 感情によって創られた有り様
他己	自己に映った他者の姿
他我	他者の経験も含め思考, 感情によって創られた有り様
自我-他我 (自我フィールド)	自我と他我の作用によって自我が肥大化したもの
自己調和	他者の影響を受けて, 自己と照らし合わせることにより新たな自己を創り出し自己調和する
自己中心的認知	他者の影響を受けても, 全く自己変容せず自己保持する

(注 5) ニュージーランドでは, 白人とマオリ族との間でワイタンギ条約が締結(1982)されて, 二文化共生路線になっている。かつて, 白人による領土拡大政策がニュージーランド全域におよび, マオリ戦争, そして歴史的な反省の時間を経て(Matsumoto 2011), 白人の自文化としてのマオリに目が向けられた経緯がある。ニュージーランド代表のラグビーチームが試合前に行う舞うハカと呼ばれる, マオリ族の戦士が戦いの前にしていた舞踊を取り入れているのは, 共生の象徴的表現である。

[引用文献]

- Chadwick, Ruth 2009. 「応用倫理学では何が「応用」されているのか?」応用倫理. 2, pp.2-12.
- 福田・砂子. 2018. 「共生社会へ向けた人間構造の仕組みとその在り方: 自己と他者の関係に焦点をあてて」『共生社会システム研究』12, pp.111-131.
- 一般財団法人剣道連盟 年不詳. 「剣道の理念」[https:// www. kendo. or. jp / knowledge/kendo-concept/](https://www.kendo.or.jp/knowledge/kendo-concept/) (最終閲覧日: 2018年9月10日).
- 鎌田茂雄. 1986. 『五輪書』講談社.
- 小谷澄之・他(編). 1987-1988. 『嘉納治五郎大系5巻』本の友社, 講道館書誌編纂会, pp.39-43
- 公益財団合気会HP. 年不詳. 『合気道とは』 [http:// www. aikikai. or. jp/ aikido/ index.html](http://www.aikikai.or.jp/aikido/index.html) (最終閲覧日: 2018年9月13日).
- 公益財団法人 日本武道館. 年不詳. 『武道憲章』 [http:// www. nipponbudokan. or. jp/shinkoujigyou/kenshou](http://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyou/kenshou) (最終閲覧日: 2018年9月13日).
- 工藤龍太・志々田文明. 2010. 「合気道における合気の意味: 植芝盛平とその弟子たちの言説を中心に」『体育学研究』55, pp.453-469.
- 万生館合気道. 年不詳. 『合気道について』 [http:// www. kanshusunadomari- manseikanaikido. com/ japanese/ aboutaikido/ index. html](http://www.kanshusunadomari-manseikanaikido.com/japanese/aboutaikido/index.html) (最終閲覧日: 2018年9月13日).
- Margaret, Greenhalgh. 2003. *Aikido and spirituality: Japanese religious in uences in a martial art*, Durham theses, Durham University. Available at Durham E-Theses Online: <http://etheses.dur.ac.uk/4081/> (最終閲覧日: 2018年9月13日).
- 松尾光. 2014. 現代語訳『魏志倭人伝』KADOKAWA/中経出版.
- Matsumoto Akinori. 2011. *Maori Education, Biculturalism and Multiculturalism in New Zealand*. 日本ニュージーランド学会誌 18, pp.21-38.
- 宮本武蔵. 1985. (渡辺一郎編)『五輪書』岩波書店.
- 文部科学省. 2009. 『高等学校保健体育解説』 [http:// www. mext. go. jp/ component/ a_ menu/ education/ micro_ detail/ _ icsFiles/ afieldfile/ 2011/ 01/ 19 / 1282000_ 7. pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf) (最終閲覧日: 2018年9月13日)

覧日:2018年9月13日).

- 中林信二. 1994. 『武道のすすめ』島津書房.
- ノケ, アンドレ. 1996. 『心と剣』合気ニュース.
- パイエ由美子. 2016. 「植芝合気道思想(1943 年以降)―継承と展開―」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第 14 号, pp.29-56.
- 佐々木武人・藤堂良明・柏崎克彦・村田直樹. 1993. 『現代柔道論―国際化時代の柔道を考える』大修館書店.
- 志々田文明. 1978. 「合気道における技の概念と類型家に関する一考察」『武道学研究』11(2), pp.108-109.
- 志々田文明. 1992. 「「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正15年前後の植芝盛平―合気道の形成過程の研究(1)―」『武道学研究』25(29), pp.1-12.
- Shishida,F.2008. *The Process of Forming Aikido and Japanese Imperial Navy Isamu Takeshita: Through International Journal of Eastern Sports & Physical Education*,6(1), pp.76-93.
- 高橋英雄. 1986. 『武産合気』白光真宏会出版, p.14.
- 武田崇元. 2002. 『合気道開祖・植芝盛平語録 合気神髄』八幡書店.
- 植芝吉祥丸. 1962. 『合気道』出版芸術社; 復刻版.
- 植芝吉祥丸. 1999. 『合気道開祖 植芝盛平伝』出版芸術社.
- 魚住孝至. 2008. 『武道の歴史とその精神』国際武道大学附属武道スポーツ科学研究所.
- 魚住孝至. 2012. 『日本の武道の比較文化論的考察―グローバル時代の武道に向けて―』武道論集Ⅲ,国際武道大学附属武道スポーツ科学研究所, pp.11-84.

Summary

Aikido in Japanese Budo consists of the way of being when a person comes face to face with another, without the aim of fighting against the other. Fundamentally, Aikido is also the skill in Budo (Bujyutsu) of attempting to communicate with the other. Analysing the way of being in Aikido recognises the relationship between the self and the other and brings meaning to intercultural co-existence. If the recognition is different, it is possible to bring out different forms of communication, even in the same situation.

In the case that either is ethnocentric, they are unable to find harmony in the intercultural field. The relationship between the self and the other becomes weak in terms of conviviality (kyosei). In addition to the need for people to know kyosei ideology based on the way of being, we build a new idea out of a common understanding, through dialogue.

The aim of Japanese Budo is courtesy and mental training (the formation of the human person). Aiki, especially, in Aikido involves leading the establishment of harmony between the self and the other. The other immediately perceives the other within himself, as two glass balls reflect each other.

This paper proposes a new framework that allows for the development of kyosei ideology through the way of being in Japanese Budo. A new kyosei ideology involves assimilating the relationship of conflict that results from the person perceiving himself and the other within himself. We call this recognition self-harmony. The purpose of this study is to illustrate the structure of the human person through the connotation of self-harmony from the way of being in Aikido. Self-harmony means that recognition transfigures the way of being, causing major changes in communication.

Keywords: Aikido, Kyosei, Self-Harmony, Internal Co-existence, Self-control

要旨

合気道は人との争いを目的とした武術ではなく、人が他者と相対した時の在り方によって成り立っているものであり、人とのコミュニケーションを図る武道であるともいえる。合気道における自己と他者の関係から在り方がどのように捉えられているのか解析していくことは、人類が共生していく在り方にも大きな意味をもたらすとみている。

日本の武道は礼儀、修養(克己)を目的としていて、とりわけ合気道における合気とは、自他の調和のうち他者を導くことである。二つのガラス玉が互いに他を映すように、他者把握は自らの内に即時的に他者のこころを感覚的に捉えるところにある。感覚は自己のものでありながら他者を映しているので、自他の関係性を内に視て、自らの一部としての調和をすることができる。人の在り方とは自他の関係を支えるこうした一連の認知である。同じ状況であっても認知(在り方)が異なれば異なるコミュニケーションが引き出せる。

しかし、こうした調和的認知に基づく武道は一朝一夕に成ったのではない。自らを守るならまだしも、外敵を倒し自らを拡張していくためにも、武術は利用されてきた。武力に頼る状況は現在でも変わってはいない。長い歴史を経て、武道は敵を倒すという術から相手と調和する術を見出した。自らを守らなければならない極限的な状況にあって、相手と調和することができるとしたら、それはもはや空理空論ではない。そこから認知的的方法論を抽出できるならば、強靱な共生論が導かれるだろう。

そこで本論は合気道に共生の概念とその実存的在り方を見出し、新たな共生概念を浮き彫りにする。新たな共生概念とは自己と他者を己の内に視て対立関係を融合していくものであり、これを自己調和と呼ぶ。本研究の論点は、合気道の在り方から人間の構造的な理解を導き、その構造に調和的認知をもたらす自己調和を見出すところにある。